

## 『人』と『認知症』という見方・捉え方

人を見るスキルを高めれば  
支援は高まり充実してくる

### 『人と認知症と向き合うということ』基本 3ヶ条

#### その1

身体と心、社会、環境、魂は本質的なところで互いに信頼し支え合っている。ホリスティック（包括的）に捉える支援が大切。

#### その2

つまり、認知症そのものの介護するというよりも、その人の心の中にある感情を癒すことに目を向けるべき。

#### その3

支援の本質は、人として生きてきた姿が尊ばれ、生きている姿に関心が向けられ、生きていく姿そのものの創造に役立てることだ。

## 今日のメニュー

1. 繋がるということ
2. 認知症と認知症のケア
3. リスクマネジメント  
誤薬と転倒予防について
4. まとめ

## 『繋がるということ』

人と認知症を理解するためのキーワード

## なぜ、さわり・ふれるのか ～仮説～

- 失われていく世界とのつながり
- 失われていく自己
- 自分を探す旅
- 誰かと何かと繋がりたい 繋がっていたい
- 繋がっている事での安心するのではないか

人は常に何かと  
繋がっている  
繋がろうとしている

そのことで様々な関係と  
自分とのバランスを保っている  
(人 物 地域 感じる全てetc)

どう繋がっていたか？（過去）  
どう繋がっているか？（現在）  
どう繋がってほしいか？（未来）

人やものとの繋がりで、もっとも大切なこと

『認知症とは？』

## 認知症とは（介護保険法上の定義）

（認知症に関する調査研究の推進等）

第五条の二 国及び地方公共団体は、被保険者に対して認知症（脳血管疾患アルツハイマー病その他の要因に基づく脳の器質的な変化により日常生活に支障が生じる程度にまで記憶機能及びその他の認知機能が低下した状態をいう。以下同じ。）に係る適切な保健医療サービス及び福祉サービスを提供するため、認知症の予防、診断及び治療並びに認知症である者の心身の特性に応じた介護方法に関する調査研究の推進並びにその成果の活用に努めるとともに、認知症である者の支援に係る人材の確保及び資質の向上を図るために必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

その1

### 脳血管疾患、アルツハイマー 病その他の要因に基づく

原因となる疾患

約70～100

その2

## 脳の器質的な変化により 脳という器が壊れてゆく

その3

## 日常生活に支障が生じる 程度にまで

これまでできていたことが  
できたりできなかったりと  
困難と思える状態へと向かう

その4

# 記憶機能及びその他の 認知機能が低下した状態

知的な能力が変化してゆく

## 認知機能とは

### 記憶の機能

- ・ 思い出す、覚える機能

### 見当識の機能

- ・ 時間や場所の見当をつける機能
- ・ 物の名前を見当をつける機能

### 実行機能（行為／認識／言語など）

- ・ 生活するための行為  
（着替え・買い物・掃除・料理・トイレの始末等）
- ・ 言葉で伝えること
- ・ 字が書くこと
- ・ 判断をすること
- ・ 計算をすること
- ・ 同時に複数の事を行うこと 等々

## 認知症とは（介護保険法上からの抜粋）

- 脳血管疾患、アルツハイマー病その他の要因に基づく
- 脳の器質的な変化により
- 日常生活に支障が生じる程度にまで
- 記憶機能及びその他の認知機能が低下した状態をいう。

## 『認知症ケアとは？』

# 『点』から『線』へ そして『面』への話し

困っているポイントはここ！！

## 日常生活に支障が生じる

これまでできていたことが  
できたりできなかったりと  
困難と思える状態へと向かう

もっと具体的に  
わかりやすく  
皆さんの  
身近な出来事を通して  
考えてみます

お茶を飲むまで

～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

お茶が飲みたいと思う	台所へ歩く
正座の状態からテーブルに両手をつく	お湯を沸かそうと思う
左足は立てひざを保つ	やかんを手にする
右の足の裏を床につける	やかんのふたをとる
テーブルに置いた両手に体重をかける（この時点	やかんの水を入れる口を水道の蛇口に合わせる
で、よっこいしょ！と出る）	左手にやかんを持ち
左の足の裏を床につける	右手で蛇口をひねる
前傾姿勢を両手で支える	水の量を確認しながら適量を入れる
腰を伸ばしながら立ち上がる	やかんのふたを閉める
台所へ向きを変える	

～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

やかんをコンロに置く	お茶っ葉の入った筒のふたを開ける
コンロのダイヤルを回す	筒のふたを左手に持つ
火力を調節する	右手で筒を持ち
やかんの様子を気にかける	筒のふたに適量のお茶っ葉を入れる
お茶っ葉のある場所の見当をつける	急須のふたをとり
左手で食器棚の扉を開ける	急須にお茶っ葉を入れる
お茶っ葉の入った筒を探す	お湯が沸いたか気にかける
右手で食器棚からお茶っ葉が入った筒を取り	お湯の沸き具合を音でも確認する
出し置く	お湯が沸いたかどうか湯気の出具合で確認する
食器棚から急須を取り出し置く	お湯が沸いたことを認識する
食器棚から湯飲み茶碗を取り出し置く	コンロのダイヤルを回し火と止める
食器棚の扉を閉める	

～「お茶を飲むまで」の思考と認識と行為と感情の関係～

やかんを持ち上げ	居間へ歩く（慎重に歩く）
沸いたお湯を適量急須に注ぎこむ	居間のテーブルにお茶の入った湯のみ茶碗を置く
急須のふたを閉める	両手をテーブルにつき座る（よっこらしよ！と口から出る）
湯飲み茶碗にお湯を適量入れる（湯のみ茶碗を温めるため）	楽な体勢になる
やかんをコンロの上に戻す	右手に湯飲み茶碗を持つ
湯飲み茶碗のお湯を捨てる	左手で底を支える持つ
湯飲み茶碗に急須に入っているお茶を注ぎこむ	両手で丁寧に持ちゆっくりと火傷しないよう口元に近づける
湯飲み茶碗を持つ	熱さを確認しながら口に注ぎ込み飲む

『私たちの中で起こっている認知機能の理解』

～思考や認識や行為や感情の関係の繋がりによって達成される～

- 私達は、普段の生活において、このように細かい思考や認識や行為や感情の関係の連続であることまで考えたり、意識してお茶を淹れない。
- だから、いざ分析してみると多くの人は大雑把に分類することになる。
- しかし、ここで思い出したことは、「お茶を飲むまで」と言う行為は、このように様々な思考や認識や行為や感情の関係の集まりということ。
- その一つひとつが繋がりがあって一連の生活動作として、若しくは生命活動として自然にやっけてのけている。

『私たちの中で起こっている認知機能の理解』  
 ～思考や認識や行為や感情の関係の繋がりによって達成される～

- 一つの思考や認識や行為や感情を「点」と考えるのであれば、その「点」の一つひとつが出来るのと同時に、繋がってはじめて線となり、一つの目的を達成することで、面となり、生活に広がり潤いをもたせている。
- しかし、この「点」のどこかが、自然の変化である老化或いは、ある種の疾病や障害又は不自由であったり、更に「点」を阻害するような他の力が加わったとしたら果たしてどうなるであろうか。
- 間違いなく目的は達成されず、お茶を飲むことはできないであろう。目的が達成されるどころか、途中で戸惑い、混乱し、不安になるであろう。自分を責める人もあれば、他のせいにする人もいるであろう。

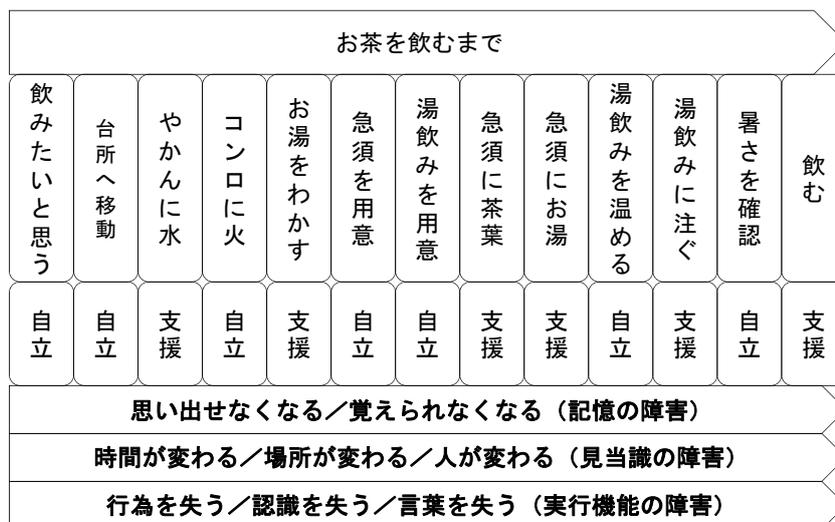
『私たちの中で起こっている認知機能の理解』  
 知る⇒経験する⇒感じる⇒気づく の繰り返し

- 認知機能の変化によって、生活に不自由を感じる。
- 記憶、見当、実行機能の不自由がその中枢にあるとすれば、「お茶を飲むまで」の一連の思考や認識や行為や感情の関係に不適應な状態をきたす事は言うまでもない。
- ましてや、今までできていたことが出来なくなってゆく様を経験するのは、耐え難い経験とを感じる人もいる。

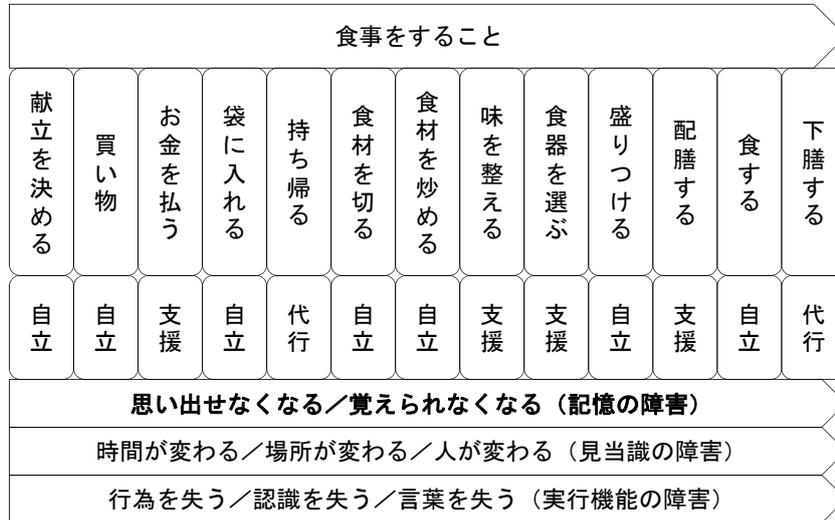
## 『私たちの中で起こっている認知機能の理解』 知る⇒経験する⇒感じる⇒気づく の繰り返し

- 様々な不自由に照らし合わせれば、それぞれに違う支援がいる。彼らの不適応を知るということは、生活をベースとした、この一連の思考や認識や行為や感情の関係を分析できる力とそこから彼らの不適応に対する支援を届ける力を持つこと。
- 私たちの専門性とは、「ひとの生活の営みの中で起こる変化」を知り、経験し、感じ、気づくことであり、健全な生命活動の支援につなげてゆくこと。
- 確かに「認知症の理解」も大切だが、その前に「ひとの営みの理解」が先だろうと思う。

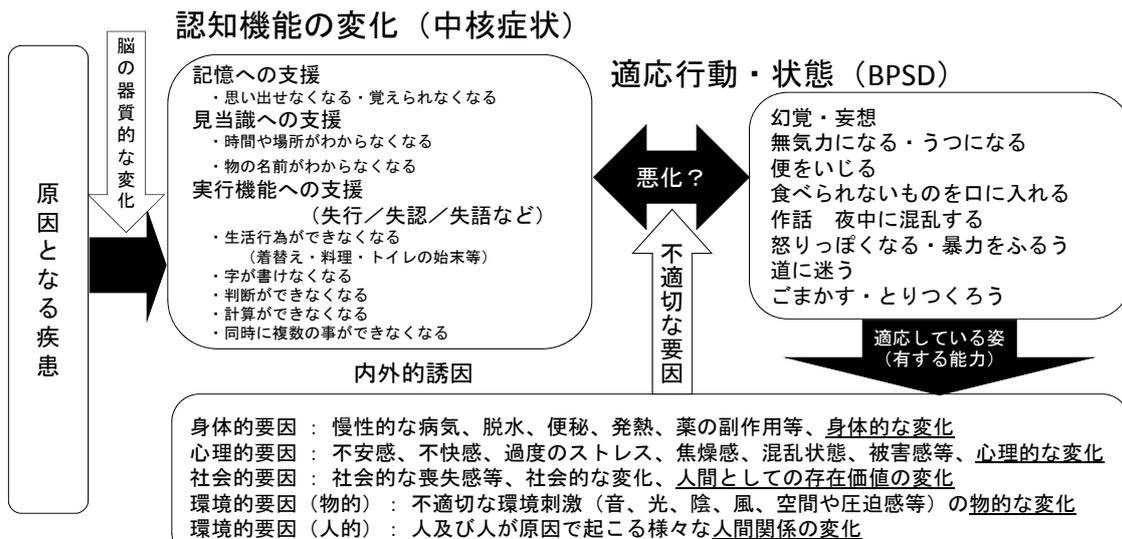
## 生活の支援のポイント 『生活の点の見極めから線へ繋げる（生活の再構築）』 認知症の状態にある人の生活行為の困りごとと支援の仕組み



生活の支援のポイント 『生活の点の見極めから線へ繋げる（生活の再構築）』  
認知症の状態にある人の生活行為の困りごとと支援の仕組み



『人』と『認知症』の繋がり図（全体像）



人（宮崎さん）の過去・現在・未来・終末

# 認知症というのは

認知機能の障害があることによって  
日常生活の繋がりが  
うまく具合にいかなくなってゆく状態のことをいう

つまり

認知症というのは、複合した認知機能障害の総称である。

どの機能が障害を受け、日常生活に影響しているのかを  
診る(見る、観る、看る、視る)事が重要なのです。

# その人の持つ 認知症をケア（介護・支援） するということは

日常生活をベースに  
その人の繋がりを見極めながら  
ケア・介護・支援してゆくことであり  
または  
そういう社会を目指してゆくことなのです

困っているポイントはここ！！

## 日常生活に支障が生じる

これまでできていたことが  
できたりできなかったりと  
困難と思える状態へと向かう

## 認知機能とは

### 記憶の機能

- ・ 思い出す、覚える機能

### 見当識の機能

- ・ 時間や場所の見当をつける機能
- ・ 物の名前の見当をつける機能

### 実行機能（行為／認識／言語など）

- ・ 生活するための行為  
（着替え・買い物・掃除・料理・トイレの始末等）
- ・ 言葉で伝えること
- ・ 字が書くこと
- ・ 判断をすること
- ・ 計算をすること
- ・ 同時に複数の事を行うこと 等々

## 認知機能への大切な3つの働きかけ

- ・ 『手続き記憶への働きかけ』
- ・ 『見当識への働きかけ』
- ・ 『実行機能への働きかけ』

## 3つの大切なこと

- ① 『自分のことは自分ですること』
- ② 『互いに助け合うこと』
- ③ 『社会と繋がっていること』

## リスクマネジメント とは

「予測を立てて考え、行動する力」



『養い育む』

## 認知症と人の支援における 実務的なリスクマネジメントとは

- 認知症と人の支援におけるリスクマネジメントとは、先程の認知症の状態にある人のリスクを防止することを意味します。
- また、リスクマネジメントとは、起きてしまった事故の被害を小さくすることも含んでいますので、事故への迅速な対応もリスクマネジメントの一部と考えられます。
- つまり、認知症と人の支援におけるリスクマネジメントとして重要なポイントは、認知症と人をよく理解していることを前提とし、以下の4点だと考えられます。

## 4つのポイント

- ① 事故の原因を推測できること（事故分析）
  - ② 起きてしまった事故に素早く対応できること（ダメージコントロール）
  - ③ 事故の予防に必要な情報を集めること（リスクアセスメント）
  - ④ 根本的な原因を排除し、予防のための方法を立案すること  
（リスクコントロール）
- さらに、これらのポイントをチームで共有化し、組織的な取り組みが実行されることで、認知症と人の支援におけるリスクマネジメントシステム（仕組み）が確立されることとなります。

# 基本的な考え方

リスクと向き合う・リスクと付き合う

～リスク（危険）を踏まえた上で支援します～

## リスク（危険）を踏まえた上の支援

①

- 可能な限り「自由な生活」を目指し、一律のルールやスケジュールで管理した運営は行いません。
- あわせて原則として、身体抑制、ホームの玄関、出入り口の施錠等による行動制限は行いません。

## リスク（危険）を踏まえた上の支援 ②

- 社会生活を営む上で完全なリスク回避はあり得ず、人の暮らしにリスクはつきものだと考えています。
- 安全確保は重視しますが、抑制や過度な行動制限につながらないように留意して支援します。

## リスク（危険）を踏まえた上の支援 ③

- 合わせて、リスクの予測や回避、その手立てが自分でできなくなった人が入居・利用する施設であることを踏まえ、支援者であるスタッフが利用者・入居者ひとりひとりの能力を見極めながら、リスクを予測して環境を整えたり、利用者・入居者がリスクに対処できるように支援していきます。

## 生活の見極めができていますか？

- 『人はその有する能力に応じ自立した日常生活を営んでいる』
- しかし、認知症があることによって、この当たり前にできていた能力や動作である有する能力に応じられなくなってゆき、自立した日常生活を営めなくなってゆく瞬間を生きている姿
- つまり、このギャップを見極める事がマネジメントの本質（仕事の本質）であり、介護保険法上の目的（理念）に遵守した運営につながる

ひとつの姿（Only One）

## レビー小体型認知症の世界を共に（抜粋）

グループホームアウル登別館 発表者 河合千穂  
共同研究者：宮崎杉子 篠田茂義 加藤正之 菊地美里 伊岐見  
順子

## Nさんと認知症

- ・ 77歳 男性
- ・ 要介護 2
- ・ 平成24年頃  
レビー小体型認知症発病
- ・ 主な症状  
パーキンソン症状 幻視・幻覚

## 突然ですが 事例の検討

- 車椅子から椅子へ移乗する時
- ベッドに横になる時
- 立ち上がる時など
- 同時に複数の事を伝えた場合
- 体の動かし方の組み立てが難しくなる人
- 皆さんの支援の一手はどうしますか？

## 移乗する時は

- 椅子同士を側に置くと、どう動いたらいいのかわからなくなり、動きが止まることがある。



- 椅子同士を少し離す。
- 目的の場所を視覚で確認する。
- テーブルつたいに歩く。
- 椅子へ移乗する。

主体性  
選択性  
関係性

無意識の領域に働きかけ  
自ら動きたくなるような  
声掛け・関わり  
スタッフが気づいたこと

互いに必要とする関係を  
作ることが出来た  
スタッフが気づいたこと

『まとめ』

# 『前提を考える』

『の』から『と』へのすすめ

### 3. これからの認知症ケアの方向性

Text p37~39

#### 3-2) パーソン・センタード・ケアの基本的な理解

##### 3-2)-(2) 認知症の「人」を理解するということ

### 認知症の 人

これまでのケアは、認知症を「病気」に目を向け、「人」という部分をあまりにも軽視してきた

### 認知症の 人

近年では、病気の理解は大切だが、病気を抱えた人を理解するという視点が大切にされるようになって来た

- 認知症の人の「認知症」と「人」を理解する
  - 1) 「認知症」を理解するということ
    - 脳の障害によって起こる病気を理解する（専門職として必須の知識）
    - ① 原因疾患の特徴を理解する（原因と臨床的特徴）
    - ② 原因疾患別のケアのあり方を理解する
  - 2) 「人」を理解するということ
    - 性格傾向の理解：気質、能力、対処スタイル
    - 生活歴を理解する：本人の人生の歴史を理解する（物語を理解する）
    - 健康状態・感覚機能（視力や聴力等）の理解
    - その人をめぐる社会心理学的状況の理解：社会との関わり、人間関係のパターン

出典) 認知症介護研究・研修センター監「認知症介護基礎研修標準テキスト」.48,ワールドプランニング,東京 (2015) 55

## 「認知症の人」への提言

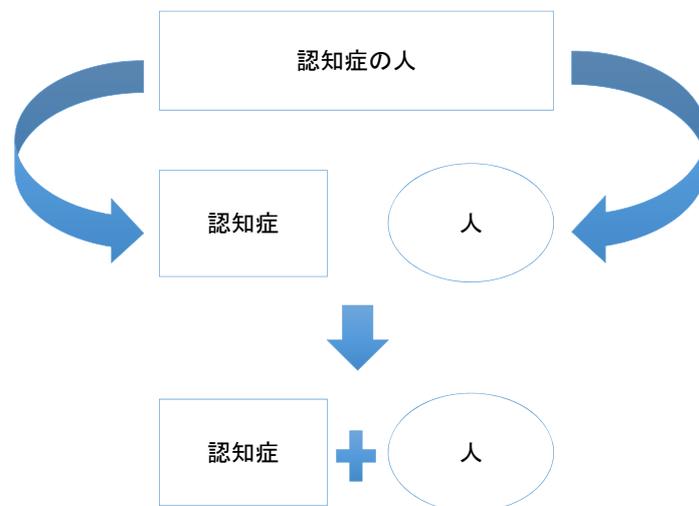
- 認知症のケアなのか？
- 人のケアなのか？
- 認知症の状態をケアする
- 人が生きることを支援する
- 認知症の理解
- 人の理解

それぞれ別々に考えてみる

別々に捉えた（考えた）上で  
足して考えてみる  
すると

認知症を持つ『人の姿』が見えてくる

## 『認知症』と『人』の図解



## これまで から これから

### 認知症⇒人

- ⇒認知症の人・認知症高齢者
- ⇒認知症の宮崎さん
- ⇒便を壁に塗り付ける
- ⇒弄便行為
- ⇒つなぎ服

### 人⇒認知症

- ⇒認知症と人
- ⇒宮崎さんに認知症
- ⇒便を壁に塗り付ける
- ⇒便の処理が困難
- ⇒事前のアセスメントを充実
- ⇒生活のピンポイントの支援

## 『の』から『と』へ

『認知症の人』



『認知症』 と 『人』



認知症を通して人を一括りに捉える文化

人と認知症をそれぞれ捉える文化

# 「認知症の人」から 「認知症」と「人」へ

## 人の姿と認知症

- 姿の捉え方からスタート  
どんな姿かと思っているかがその後の関わりや支援  
(介護・ケア)に影響する

視点（姿の捉え方）は認識を創造し  
認識は経験を創造する

「前提」を変えないと  
「ケア」は変わらない

『心が先、現実の後』

僕の前提

## 『Doing』から『Being』へ

私達の在り方（Being）ひとつで  
行い（Doing）が変わるのです！

すべては  
繋がっているということ  
ですから  
その繋がりを大切にすることなんです

ひとは  
どのような状態であっても  
感情・感性は最期まで  
そこに「在る」ものです

悲しみ・怒り・羨望・不安・愛

皆さんお疲れ様でした。  
ありがとうございました。

のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・×・?!		のりしろ
	時	No.		時	No.		時	No.	
	場所			場所			場所		
	ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて		
のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・×・?!		のりしろ
	時	No.		時	No.		時	No.	
	場所			場所			場所		
	ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて		
のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・×・?!		のりしろ	○・ <b>×</b> ・?!	【例】	のりしろ
	時	No.		時	No.		時	No. 12	
	場所			場所			場所 廊下		
	ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			ということについて  と思った  いつも・たまに・はじめて			いろいろな物が 置かれている  ということについて  邪魔だし 殺風景  と思った  いつも・たまに・はじめて		